九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国における溝口雄三の中国近代像の受容

王, 晶
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/24643

出版情報：Comparatio. 15, pp.101-110, 2011-12-28. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

中国における溝口雄三の中国近代像の受容

王　晶

はじめに

中国思想史研究者である溝口雄三は中国における「近代」という問題に長い歳月を費やし、中国の近代について従来の視点と大きく異なる彼自身の独特な見方を提示している。それはヨーロッパ中心主義を放棄した「異」ヨーロッパ的近代という中国近代像と多元的近代という世界像である。中国歴史の内部から発した「異」ヨーロッパ的近代という主張は、西洋の衝撃によって中国が近代を歩み始めたという従来の外発的な見方に対する大きな挑戦と反駁となる。そして中国の内発的な近代を主張することを通じて、ヨーロッパ的な近代の絶対的な地位を揺るがし、それを相対化したのである。グローバリゼーションが急激に進む今日において、溝口雄三の近代中国像とそれに関連する世界像はどのような意義を持ち、われわれはそれをどのように発展させるのか、そうした問題を考慮しながら、本論の内容を展開していきたい。

一　溝口中国学に対する評価

溝口雄三の描いた中国近代像は、日本における中国研究として、中日両国の研究者、特に中国の歴史哲学者たちから盛んに議論されている。例えば、日本側で並木頼寿は「日本における中国近代史研究の動向」の中で次のように述べている。

本野英一「一八六〇年代上海に於ける買弁登録制度の挫折と輸出取引機構の改変」は中国の近代を半封建・半植民地社会として把握する従来の通説に対して、アヘン戦争以後の中国が十七・十八世紀の中国と断絶したものではなく、外国資本はこの中国社会内部に深く浸透してこれを変えるような力を持ち得なかったことを(中略)明らかにしようとしている。こうした観点の転換を思想史の分野で敢行したのが溝口雄三である。(注1)

溝口雄三は、外国の衝撃は中国を変えるほどの力を持たなかったとする従来の通説に挑戦して転換をした人物であるというのが、並木頼寿の評価である。

加々美光行は、『鏡の中の日本と中国―中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座―』と題する著書の中で、溝口雄三の主張をオリエンタリズムとの関係性から見て次のように述べる。

「近代化」がいかに内発的なものであっても、その内容が「欧米近代化」モデルを目標とする可能性も依然あるからだ。溝口はこの点に関しては、縦糸の内発性が強く現れれば、仮にその内容が「欧米」モデルに近い方向を辿ったにせよ、「オリエンタリズム」の受動性は克服されると楽観しているように思われる。(中略)問題は、そうした縦軸の「内発的近代化」が、横軸から押し寄せる「外発的な欧米近代化」の圧力を凌いで、「東方アジア」の「内発的近代化」に成功しうるのかという点にある。つまり、溝口風にいえば、縦糸が横糸を凌駕

し、「オリエンタリズム」の圧力に勝利することができるのか、ということである。（注2）

「「オリエンタリズム」の受動性は克服されると楽観しているように思われる」、「「オリエンタリズム」の圧力に勝利することができるのか」という指摘をみれば、溝口雄三が描いた中国近代像に対する加々美光行の批判と懐疑は明らかである。

そのほか溝口雄三の著書に対する書評はいくつかある。例えば奥崎祐司は「書評溝口雄三『中国前近代思想の屈折と展開』」の中で、「本書は、この時期の中国思想史研究において、見事な一つの成果を挙げている。今後、この時期を研究するものがけっして無視して通ることのできぬ業績となっていることは確かである」と評価してから溝口雄三の主張に対する疑問を述べ、溝口雄三の見方に限界があると指摘したのである（注3）。そのほか、溝口雄三の他の著書『方法としての中国』と『中国の衝撃』に対する書評（注4）もある。それぞれ挙げてみれば、「本書はこれから中国研究を担う者にとって必読の書といえよう」、「全面的に同意するのではないけれども、著者の方法論とも言うべき付論は、歴史学を志したり、関心のある向きには、目を通しておいてもらいたい一文である」と評価した内容である。そのほか、異議を唱えるところもある。日本側において、書評を除いて溝口雄三の中国学に関して言及した文章は管見した限りそれほど多くはない。

次に溝口雄三に対する中国側の評価を見てみる。

武漢大学の中国哲学研究者の蔡慶は「溝口雄三的中国学方法研究」の中で次のように述べている。

溝口雄三は当代日本中国研究における有名な学者である。彼は思想史、哲学史、社会史、経済史などの広い分野にわたって中国研究を行い、相当な成果をあげた。特に中国学研究方法において、溝口雄三は西洋的範疇、論理、価値判断基準をもって東方思想文化を計る従来のやり方に対して、文化の価値の多元性という観点を主張し、「アジア近代」における主体性という問題を提出して、中日学界で広く注目された。溝口雄三の中国学研究方法は時代的意義も学術的意義もそなえている。（注5）

西洋的範疇、論理、価値判断基準をもって東方アジアを計る従来のやり方に対して、アジア近代と多元的観点を主張した点で、蔡慶は溝口雄三を高く評価している。

中国社会科学院の葉坦は「日本中国学家溝口雄三」の中で次のように評価している。

このような主張は観念的に、理性的に「ヨーロッパ中心論」の限界を解明しただけでなく、具体的、客観的研究方法と成果で中国学研究に貴重な理論方法と判断基準を提供した点で、さらに重要である。溝口教授は「ヨーロッパ中心論」を否定すると同時に、各国と各民族独自の価値と歴史プロセスを評価することだけにとどまらず、それを超えて、もっと広い「グローバルな視野」を見いだそうとした。（注6）

史艶玲、張如意は「日本中国学研究的新視角—当代漢学家溝口雄三的中国学研究—」という論文の中で、多元化、内発的な近代、ヨーロッパ価値体系の相対化という三つの点から溝口雄三の新た

な研究視角を解釈している。（注7）

中国社会科学院近代史所の李長莉は「揭示多元世界中的中国原理—溝口雄三的中国思想研究—」の中で次のように述べている。

溝口雄三は西洋的な近代のパターンを唯一の普遍的認識方式とする見かたが、アジア国家の歴史の本来の姿を歪曲したと指摘して、従来の認識方式を徹底的に批判した。彼は世界の多元性と平等性の立場に立って、中国の歴史自身の中から中国思想の内在的流れを把握し、中国自身の価値観念の中から固有理念を発見すべきだと主張した。（注8）

溝口は自分の研究を通じて、世界近代化のプロセスは多元的であり、西洋原理を普遍的、唯一の近代的規則とした従来の見かたは、西洋中心主義と西洋優越意識によって生まれた偏見であると認識した。この結論は、従来の近代認識への根本的な見直しであり、また「近代的」価値への本質的な懐疑でもある。（注9）

李長莉は主に「ヨーロッパ中心論に対する徹底的な批判」と「世界の多元化への要求」という点から、溝口雄三の主張を高く評価している。

中国学術界の中国思想と哲学分野において溝口雄三の見方を解釈し、分析した論文は他にもある（注10）。ここでは紙面の関係で省略する。

中国側で溝口雄三の中国学を対象とした論文と評論が、一九九一年、一九九二年から最近まで盛んに書かれていることは、以上のことから分かる。そして日本で書かれた論文と評論とは相違点があることに注目する。日本の中国研究者は溝口雄三の主張が新たな視座を開き、「思想史の分野で転換を敢行した」と評価すると同時に、それに対する懐疑と批判をも提出している。一方中国学術界は溝口雄三が提出した新たな視角に非常に注目し、「ヨーロッパ中心論への批判」、「中国の固有原理の発見」、「アジア近代の主体性という問題」といった積極的な評価以外の論文は見られないのである。これは中国近代を研究の主題とする溝口雄三に対して中国側には批判意識が欠如していると言えるのではないだろうか。本論は、先述の評価を土台にして、日本側の冷静な態度と肯定的評価が圧倒的な中国側の態度が共存する状況を踏まえながら、近代中国像の全面的な検討を目指すこととする。

二　内発的な「異」ヨーロッパ的近代

溝口雄三の言う「異」ヨーロッパ的な近代とは、文字通りヨーロッパ的な近代と異なるという意味である。ヨーロッパ的な近代観が絶対的な価値判断の基準となって、中国の優劣を決める道具となったことに対して、溝口雄三は批判的である。そして次のように言う。

今後わたくしたちがアジアの近代を考えるには、日本にせよ中国にせよ、それ自体の前近代にもとづいたそれぞれの「異」ヨーロッパ的独自性に即して考える必要があるということになろう。（注11）

中国の近代はほかならぬそれ自身の前近代をあらかじめ母胎としており、したがってそれは中国の前近代の歴史的独自

性をみずからの内に継承するものである。（注12）

世界史的な普遍もまた、この「異」すなわち個別的独自性に当然、立脚させられることになる。（注13）

前近代の歴史との連続性、そして中国固有の独自性という二点が「異」ヨーロッパの持つ特徴であるということは、まず右の内容から分かる。そして中国の近代は、中国の歴史に即して見る必要があると溝口雄三は指摘している。これは一見非常に簡単なことのように思えるかもしれないが、西洋的論理が深く浸透したアジアにおいて、ヨーロッパ中心主義から離れて、先入観を持たずに中国歴史の内部に入って中国独自の近代の発展プロセスを探求するというのは、容易なことではない。にもかかわらず、溝口雄三は様々な具体的な例を挙げている。その一つの例は、大同思想である。

歴代王朝によって継承されてきた「天」の統治理念（民以食為天、均貧富、万物得其所）は、例えば清末の大同思想、孫文の民主主義（四億人の豊衣豊食）、またその後の社会主義理念として、構造式を変えながらも、基本的には依然として継承されつづけた。（注14）

この大同的な近代は、十九、二十世紀に突如として起こったというのではない。（中略）近代的大同思想は戴震ら――いやさらにさかのぼって十六、十七世紀の――中国前近代思想に直接結びつけることができる。（注15）

ここで思想レベルの「大同」が取り上げられている。かつてからあった「天」の理念は、十六、十七世紀になってから中国の全体的生存をめざす大同的調和を基調としたものとなり、清末の大同思想から孫文の大同共和的な社会革命へ、さらには毛沢東の人民民主主義的な革命へと一貫して発展していくと溝口雄三は述べる。

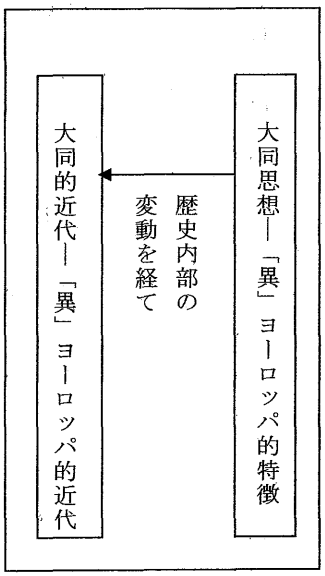
ここで「大同」は、前の歴史との連続性を見せながら、ヨーロッパにはないという独自性をも持っているので、それは当然「異」ヨーロッパ的な特徴である。しかし「異」ヨーロッパ的な特徴を持つ「大同」は如何に近代と関連付けられるのか。言い換えれば、「異」ヨーロッパ的特徴から「異」ヨーロッパ的な近代、大同思想から大同的な近代に至る道は、どのように位置づけられるのか。それは、溝口雄三にとっての近代の概念が問うものでもあると言えよう。それについて、溝口雄三は以下のように述べている。

わたくしは最近ある国際シンポジウムで、アジアにおいて近代は、自生的な近代と、外来的な近代と、二つの側面からとらえられるべきではないか、その場合、自生的なそれは往々その国に独自な筋道を辿るであろうが、しいて共通項をあげれば、(イ)絶対的な宗教的権威あるいは擬似宗教的な政治的権威の内面支配からの離脱、(ロ)政治システムへの大衆参加、(ハ)非契約的・固定的な身分上下秩序からの解放、(ニ)民衆の経済活動の機会均等化、(ホ)医療扶助など生命保持の手段と教育の機会均等化――などが共通の指標としてあげられるのではないかと提言した。（注16）

私は十六、十七世紀以降に変化の初発が認められる中国タイプのある歴史変化の文脈を挙げたい。其の文脈をどう呼称

するか、いろいろと異論が予測されるので難しいが、この文脈を見通す視座をここでは内発変動型と呼んでおこう。（注17）

アジア近代、それをさらにアジアにおける自生的な近代と外来的な近代とに分けた溝口雄三は、日本の中国研究において近代そのものの再定義を試み、その拠点を中国においた。「大同」は中国歴史上十六、十七世紀に変動をへて初めて現れた中国における自生的な近代の一つの現われであるというのが、溝口雄三の主張である。ここで「異」ヨーロッパ的な特徴としての大同思想は、中国歴史内部の変動を通じてはじめて「異」ヨーロッパ的な近代と関連付けられ、アジアにおける自生的な近代の表れとなる。図式で表せば、次のようである。



この図式からわれわれは、中国独自の「大同的近代」とは「異」ヨーロッパ的な近代のことであるということが分かる。つまりアジアあるいは中国において、「異」とは自生の意であり、中国歴史固有のものを指す。

結果から言うと溝口雄三の「異」ヨーロッパ的な近代観は、中国史内部からの原動力という側面を特に重視して見ている。アジアの近代については、自生的な側面のほかに、外来的というもう一つの側面も捉えるべきであると溝口雄三は述べているが、結果的に、外来的な面を軽視していることは明らかである。それはなぜであろうか。別言すれば、「異」ヨーロッパ的な近代をそこまで重要視しなければならない理由はどこにあるのか。その点こそ吟味すべきではないかと思われる。

溝口雄三の研究において、外来的近代は重要視されてはいないが、それについて溝口は少し言及している。

もちろんそれが近代的な共和思想からさらに人民民主主義的それへ発展していく過程には、ヨーロッパの民権・平等思想やマルクシズムの摂取などがあるのだが、しかしそれも摂取を可能とするだけの大同思想の成熟があったればこそであり、外来のそれらは要するに外からの刺激であるにすぎない。（注18）

〃衝撃〃は、日本と中国について言うかぎり、前近代以来の構造を破壊したり崩壊させたりするものではなく、たんにそれぞれの前近代の脱皮を促成した、ただしその力あまってやや変形をもたらした、という程度のものであった。（注19）

「外からの刺激」、「前近代の脱皮を促成した」、「やや変形をもたらした程度のものである」と溝口雄三は、外来的近代の働きについて言う。西洋の衝撃はただ促成作用であり、核心となるのは

中国の歴史内部の流れであると理解してよかろう。言い換えればアジアの自生的な力が主であり、西洋からの衝撃は従であるということであろう。ここから東西の力関係に対する溝口雄三の態度が明らかに伺える。しかし実際には、内発的近代が必ず外発的近代を凌駕して主要な作用を発揮できるという確証はどこにもない。溝口雄三の内外の力関係に対するこうした見解は、研究上の便宜のために簡略化された恐れがあるのではないかという疑問が生まれる。加々美光行はさらに述べる。

溝口は、「東方アジア」の縦糸に発する内発的「近代化」の展開が、横糸から迫る「オリエンタリズム」の外発的な「近代化」の展開に対する「抵抗」としてではなく、むしろ外発的圧力を意識することなく、それ独自の形式で立ち上がってくるという点を強調する。(注20)

外発的な力より内発的な力をより重視する溝口雄三の論調に対して、加々美光行が懐疑的であることは明瞭である。筆者としても溝口雄三の議論は、「異」ヨーロッパ的近代は内からの力が外からの力を凌駕するという前提で成立していると考えざるを得ない。

東西世界が出会ってからの力関係は、実際計りようがなく、非常に複雑である。溝口雄三は東が西に勝るというもう一種の力分配によって、われわれに従来と異なる東西の力関係を提示したのである。しかし、内から発する力を重要視するのは、外から寄せてくる力を意識せずに済むということではないであろう。内部から発生する力と、外部から押し寄せてくる各方向からの力の総合的な作用のもとで、中国の歴史はどのように動いたのか、そうした多方向性の考察こそ、より明晰に中国の近代化の過程を分析できるのではないのかと考えられる。つまり、アジアの自生的な近代だけを重視する立場と、西洋の衝撃だけを考慮する立場を両方とも放棄して、より総合的に東西の力関係を分析する視点を創出する必要があるのではないかと思われる。

「異」ヨーロッパ的特徴を手がかりに、中国史における「異」ヨーロッパ的近代を描き出す。そして「異」ヨーロッパ的近代をもたらす内部からの原動力を、特に重要視する。こうした溝口雄三の観点が盛んに中国に受け入れられている状況を考えると、そこには大きな危険性が潜んでいるように思われる。溝口雄三の「異」ヨーロッパ的近代という主張が、中国史の過大評価につながると、それは逆の行き過ぎになってしまう。溝口雄三の近代中国観は、確かにわれわれに近代中国を見る新たな視座を提供したが、しかしその新たな観点を批判的に受け入れることが、中国の研究者にとって最も重要なことではないのか。そうした点こそ、われわれが非常に慎重に対処すべきところであると思われる。

三　中国近代の再発見と多元的世界

多元化という言葉は現代人にとって馴染みのある言葉である。しかし近代の修飾語としての「多元」は、それほど広く使われていないであろう。ところが日本の中国研究分野で溝口雄三は、ヨーロッパ的な近代と異なる中国固有の「異」ヨーロッパ的な近代を含め、もともとヨーロッパ的近代だけの一元的世界の秩序を破壊して、多元的世界秩序を主張するといった意味合いを含んだも

のを創出したのである。ただ、溝口雄三が主張する多元的近代は中国という要素とは離されないものである。

中国を方法とするということは、世界を目的とするということである。（中略）中国を方法とする世界とは、中国を構成要素の一つとする、いいかえればヨーロッパをもその構成要素の一つとした多元的な世界である。（注21）

ここで「中国をその構成要素の一つとする、ヨーロッパをもその構成要素の一つとした多元的な世界である」に注目する。中国における「異」ヨーロッパ近代とヨーロッパ近代は、同じ次元に置かれた対等の概念となっている。その結合の結果、多元的な世界観が出現する点は興味深い。この多元化世界の中で、中国を考慮することは、既に欠くことのできないものとなっている。言いかえればヨーロッパ中心の世界史はもはや無効であり、中国やほかの地域を含めた世界史を構想しなければならない。

さらに溝口雄三は次のように述べる。

われわれの中国学が中国を方法とするというのは、このように日本をも相対化する眼によって中国を相対化し、その中国によって他の世界への多元的認識を充実させるということである。また世界を目的とするというのは、相対化された多元的な原理の上にもう一層、高次の世界像といったものを創出しようということである。（注22）

「相対化された多元的な原理の上にもう一層、高次の世界像を創出する」という一文は意味深い。その点について穐山新は「中国を語る作法と「近代」―竹内好における抵抗としての中国―」と題する論文の中で次のように述べている。

溝口にとって、中国における「近代」の独自性を明らかにすることは、普遍史的な意義をもった「近代」の価値を追及することと同じなのである。（注23）

相対化された多元的な原理というのは、中国原理（中国独自の発展プロセス）、ヨーロッパ原理といった多元化世界の構成要素たるものを指す。さらにその上にもう一層の高次の世界像を創出するというのはどういうことなのか、溝口雄三はわれわれにはっきり提示しなったが、中国における独自の近代とは、普遍的な意義をもった「近代」を模索する道あるいは方法となることは明瞭である。

この二十世紀は、ヨーロッパを先進としてスタートした世紀であった。二十一世紀はアジアがヨーロッパと並進してスタートする世紀と予測されるが、その並進は先進に並ぶということではなく、先後のタテの原理を並列のヨコの原理に転換するものでなくてはならない。つまり従来の諸原理の再検討や見直しは、新しい原理の模索と創造にそのままつながるものでなくてはならない。中国を方法とするということは、世界の創造それ自体でもあるところの原理の創造に向かうということなのである。（注24）

「先後のタテの原理を並列のヨコの原理に転換するものでなくてはならない、新しい原理の模索と創造にそのままつながるものでなくてはならない」と溝口雄三は指摘しているが、創造された新しい原理は、中国原理もしくはヨーロッパ原理と転換できるもの

であり、言い換えれば、新しく創造された原理は中国でもヨーロッパでも通用するものであると言う意味であろう。ここで溝口雄三が新たな多元的近代を創出しようと呼びかけていることは明らかである。それは輪郭のない理念上の概念にとどまるにもかかわらず、近代というテーマにおいて、われわれに新たな可能性を示唆したのである。

しかし本論で指摘したいのは、この多元的近代を強調する過程で、中国的近代の再発見にともなって様々な状態が起こりうるということである。中国原理とヨーロッパ原理の対決、もしくは中国原理への一極化などという事態にも陥りかねないのではないか。つまり中国原理の発見から多元的近代、さらにもう一層の高次の世界像を創出する理念に向かって前進する途中で、中国だけを過大評価する方向に行ってしまうかもしれない。その点は中国研究者、特に中国の研究者にとって、充分認識して警戒すべきところではないのかと思われる。

おわりに

溝口雄三の近代中国像は中国研究の分野において非常に豊かな鉱脈である。しかしその資源をいかに利用するのか、それは今日あるいはこれからも直面する大きな問題であろう。特に中国にとって、溝口雄三の著書が多く訳され（注25）、それに対する評論も増えていく今日においては、溝口雄三の中国近代像の受容問題はますます重要になってくるであろう。

「異」ヨーロッパ的近代は、溝口雄三の近代中国観を導き出すキーワードとして理解されるが、中国の近代史だけを肥大化させるための道具ではない。あるいはヨーロッパ的近代を乗り越えた一種の近代超克論としてとらえられてはならない。多元的近代の一員となる中国は、ヨーロッパ的近代と共存する世界の一員としてより高次の世界を創出するように努めることこそ溝口中国観の有意義な継承となると思われる。

[付記]

一　中国語引用文の訳は筆者による拙訳である。

（注1）並木頼寿「日本における中国近代史研究の動向」（小島晋治、並木頼寿編『近代中国研究案内』第一部　岩波書店、一九九三年六月）二二頁。

（注2）加々美光行『鏡の中の日本と中国―中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座―』日本評論社、二〇〇七年八月、一七八頁。

（注3）奥崎祐司「書評溝口雄三『中国前近代思想の屈折と展開』」『歴史学研究』五〇四号、青木書店、一九八二年五月、二二頁。その他、三浦秀一「〈書評〉溝口雄三著『中国前近代思想の屈折と展開』」（『集刊東洋學』四八号、一九八二年十月）をも参考した。

（注4）臼井佐知子「溝口雄三著『方法としての中国』」『史學雜誌』九八(九)、一九八九年九月。代田智明「溝口雄三著『中

国の衝撃』」『中国研究月報』五九(三)、二〇〇五年三月。西野可奈「溝口雄三『中国の衝撃』東京大学出版会」『北東アジア研究』八号、二〇〇五年一月。以上三つの書評を参考した。

(注5) 蔡慶「溝口雄三的中国学方法研究」『武漢大学学報(人文科学版)』二〇〇三年第五六巻 第二期、一七九頁。

(注6) 葉坦「日本中国学家溝口雄三」『国外社会科学』一九九二年第六期、六〇頁。

(注7) 史艶玲、張如意「日本中国学研究的新視角—当代漢学家溝口雄三的中国学研究—」『河北大学学報(哲学社会科学版)』、二〇〇八年第五期。

(注8) 李長莉「揭示多元世界中的中国原理—溝口雄三的中国思想研究—」『国外社会科学』一九九八年第一期、五〇頁。

(注9) 同右、五一頁。

(注10) 李甦平「構築儒学的新框架—読溝口雄三的『作為方法的中国—』」『国外社会科学』一九九一年第七期、「溝口雄三(日)教授談研究中国」『哲学動態』一九九一年第三期。張萍「日本人認識中国文化的五個階段—溝口雄三教授訪談録—」『中国文化』、一九九五年第二期。顧乃忠「論文化的普遍性和特殊性—兼評孔漢思的『普遍理論』和溝口雄三的『作為方法的中国学』—」『浙江社会科学』、二〇〇二年第五期。何培忠「日本中国学考察記(二)—訪著名日本中国学家溝口雄三—」『国外社会科学』、二〇〇四年第三期。孫歌「在中国的的歴史脈動中求真—溝口雄三的学術世界—」『開発時代』、二〇一〇年第一一期等。

(注11) 溝口雄三「〈中国の近代〉をみる視点」(『方法としての中国』所収、東京大学出版会、一九八九年六月)三〇頁。

(注12) 「〈中国の近代〉をみる視点」前掲、一五頁。(注11参照)

(注13) 「〈中国の近代〉をみる視点」前掲、三十頁。(注11参照)

(注14) 溝口雄三「中国近代の源流」(『中国の衝撃』所収、東京大学出版会、二〇〇四年五月)一一三頁。

(注15) 「〈中国の近代〉をみる視点」前掲、十八頁。(注11参照)

(注16) 「中国における〈封建〉と近代」(『方法としての中国』所収、東京大学出版会、一九八九年六月)一一七頁。

(注17) 「中国近代の源流」前掲、一〇六〜一〇七頁。(注14参照)

(注18) 「〈中国の近代〉をみる視点」前掲、十四頁。(注11参照)

(注19) 溝口雄三「近代中国像の再検討」(『方法としての中国』所収、東京大学出版会、一九八九年六月)、五七〜五八頁。

(注20) 『鏡の中の日本と中国—中国学とコ・ビヘイビオリズムの視座—』前掲書、一七九—一八〇頁。(注2参照)

(注21) 「方法としての中国」(『方法としての中国』所収、東京大学出版会、一九八九年六月)一三七頁。

(注22) 同右、一三九頁。

(注23) 穐山新「中国を語る作法と「近代」—竹内好における抵抗としての中国—」『社会学ジャーナル』(三二)二〇〇七年三月、八八頁。

(注24) 「方法としての中国」前掲、一四〇頁。(注21参照)

(注25) 例えば『中国前近代思想の屈折と展開』は一九九七年に

中華書局と上海人民出版社によってそれぞれ出版された。二〇〇五年、二〇一一年にはそれぞれ再版がされている。『方法としての中国』は一九九六年に出版され、二〇一一年に再版された、『中国の思想』は一九九五年、『中国の衝撃』は二〇一一年、『中国の公と私』は二〇一一年にそれぞれ出版された。その他、溝口雄三は三十数本の論文を中国語で発表している(本人が中国語で書いたものもあれば、訳されたものもある)。